

所属	心理学研究科 臨床心理学専攻 修士課程	修了年度	2018 年度
氏名	森田 洋平	指導教員 (主査)	小池 眞規子

論文題目	労働者のネガティブな反すうと自伝的記憶の具体性が抑うつ感へ及ぼす影響について — 最新の Autobiographical Memory Test を用いて —
------	---

本文概要

【問題・目的】現代日本において、労働者の精神的健康を保つために抑うつ感の重症化を防ぐことは重要である。抑うつ感と関連がある概念として、ネガティブな反すうと自伝的記憶の具体性が挙げられる。自伝的記憶の具体性を測定する方法として、Williams & Broadbent(1986)により Autobiographical Memory Test (AMT)が開発され、現在まで様々な修正がなされている。その中で、非臨床群への有効な測定方法としてTakano, Mori, Nishiguchi, Moriya, Raes(2016)により採用された、教示や文化差について考慮されたAMTは、本研究において使用することに意義がある。また、自伝的記憶の具体性の性差についても、先行研究により示唆されており、検討することが必要である。ネガティブな反すうと自伝的記憶の具体性と抑うつ感を同時に扱う先行研究は、その関連性について扱うものがほとんどである。そこで、本研究では最新のAMTを使用して、労働者におけるネガティブな反すうと自伝的記憶の具体性と抑うつ感の関連に加え、それぞれの影響について因子レベルにおいて検討し、仮説モデルを検証することを目的とする。

【研究方法】20歳代、30歳代の労働者を対象にインターネット調査及び無記名自己記入式質問紙調査を実施した。質問紙の構成は、①フェイスシート②ネガティブな反すう尺度(Negative Rumination Scale, NRS)(伊藤・上里, 2001)③Autobiographical Memory Test (AMT)(Takano et al., 2017)④日本語版ベック抑うつ尺度(Beck Depression Inventory, BDI)(林, 1988a, 林・瀧本, 1991)である。

【結果】①AMTの分類結果について対象者の具体的な記憶の割合については、Takano et al. (2017)の割合と比べて大きな差は見られなかった。性別による具体的な記憶の割合にも大きな差は見られなかった。②因子構造についてNRSについては、因子分析を行った結果、先行研究とほぼ同様の因子構造の結果を得ることができ、信頼性も確認できた。BDIについては、長く広範に使用されていることから、信頼性が高く因子についてそのまま使用することが妥当であると判断した。③各尺度の相関NRSの各因子は、BDIの各因子に対して有意な正の相関を示した。自伝的記憶の具体性とNRS、BDIの各因子には、有意な相関は見られなかった。④共分散構造分析仮説モデルは十分な適合度を示しており、NRSの「ネガティブな反すう傾向」からBDIの「気分の動揺」、「自責感」、「生理的反応」に有意な正の標準偏回帰係数を示した。また、NRSの「ネガティブな反すうのコントロール不可能性」からBDIの「気分の動揺」、「抑制感と身体的条件」に有意な正の標準偏回帰係数を示した。そして、自伝的記憶の具体性は、BDIの「気分の動揺」に有意な負の標準偏回帰係数を示した。⑤性別による多母集団同時分析男性と女性で標準偏回帰係数に有意な差があったのは、自伝的記憶の具体性からBDIの「気分の動揺」、「生理的反応」へのパスであり、男性においてそれぞれ有意な負の標準偏回帰係数を示した。

【考察】今回の結果より、ネガティブな反すうの異なる特性が抑うつ感の異なる症状に固有の影響を及ぼすことが示唆された。また、自伝的記憶の具体性が低下する人は、問題解決に支障をきたし、気分が抑うつ的になったり、悲観的になったり、日常生活への満足感が欠如する傾向にある可能性が示唆された。また、男性の方が自伝的記憶の具体性が減少することで、問題解決に支障をきたし、気分が動揺するのみならず、生理的反応にまで影響を及ぼしている可能性が考えられた。

【主要な引用文献】松本 昇・望月 聡(2012). 抑うつと自伝的記憶の概括化 — レビューと今後の展望 — 心理学評論, 55, 4, 459-483